醒睡笑

上

和書門　類
二六七一九　號
七〇　函
七　架
三　冊

内閣文庫			
番號	和	26719	
冊數		3 (	1)
函號	204		133

国立公文書館
National Archives of Japan

和學講談所

醒睡笑之序

ここに元和九癸亥乃とし。天下泰平
人民豊楽のおりから。某小僧の時より。
耳にふれてをもしろくおかしかり
つる事を反故の端にかきとめおきた
り。是年七十にあまり。策乃廉れ明暮。
心をやそむるひまくてうろ志ば
せし筆の流れをこれぐどれつらう睡
さやして是梅さばまくらつ

醒睡笑と名付(かづけ)かくいふ事なりこさ古
と。八巻(くゑん)となして於そのミ

醒睡笑巻之一目録

名津希親方(かつけおやかた)

貴人行跡(きにんのこうせき)

躻(うつけ)

鈍太郎(どんたらう)

賢達之事(りこざい)

醒睡笑巻之一

名津希親方

▲いろはをもしらぬこざかしき俗(ぞく)。何か
東堂(とうだう)乃庵下(ざんか)よりいへり。我(わ)がく身(み)もかく
ぞふけり。名(てうか)をまそこうりんをいうぐふしけ。
何(なま)とぞ。れ乗(さうとん)つる右乗(うゑりん)つとなをとれさゝ記
よし(のぞこ)らうーうハ。東堂大うこそちれつな
ふひとつ。たもひよりふれをとりて一さう
せよとし何まバうーうバ。日出れ乗つ(ろうかんさうとん)

はさかよりまいり東堂には、らいくさやうの大なる物はかつてなしるで。愚僧(ぐそう)までに人のかうへんをせんぜ御きいかふとこゝまで。くぶんれいなどこゝにやかまり大なる物とハならんぞどう尾籠と申さるさへ御座ハ

▲ちろのどくべれをそと持ありしが。いろはよりわりまへがかござの文をさへよむ事なしおる時地下人(ぢげにん)まいりて。

我名をかへさまほしまれどもいのいろはをとかりしにをさいなとつきうやいやそれなりとくぞろなとやはゝんいやはなとはなとはなとれられども、いやくぞそをこしながらてたゝにたなをつきうふ御座つると申されば。すべへとちたれつとつほうぞといへり。

▲こゝろねうきさる侍のひらりんまへ十

かまるこれありけるを弥十郎とぞ
きける。或時途にてある人が弥十郎とよび
出し、そちは手よりも、かまりありけるが
まりひかどにて、ひふりしたる悪馬の背よりおされ
たどかりしときは、ことを聞へひく
と、わひられど、さやうとぞる悪とつき
られぞ。いさゝかもやいかすいたよ
▲佐渡に本覚坊とて山伏ありて治乙
とて弟子を抱しが、あるとし三郎代と

号し、学入させより、立て師匠を抱への
巡行す。続いて本国にわたりね。師匠本覚
たいめんのとき、治乙やけるやう、二度に
き。先達修験を加へられるを、くゝへ大丈に
おされてゆとかくりけまいばかりたを久々
まいつゝ、嬲するもあれさへさやうに
大なれるを、ばかりねに、体の事あり。
ありかりし、本山ふつくさゝる衣。
よんねを又いくなるてうぐて

かれとぞなづけける

▲禅門とよばるゝ者ハむかし名をば太兵
といふ人なりけるが子どもに世をゆづ
りて後ハ禅門といふよし。かのこ
まりて八兄弟親しきとよろこびハぞ
のまゝひじきと名をかへて事して
座けるなれど。其後ハ仕まゐひといふ
ひしきと後の人そちが名ハ太郎八こ
ちそけるなれバきんいとくへとのりんを

ひじき

▲小性乃名をつけたるとつきそよぶ人の
をぢんの中へそやとかくしおとひされ
ぐらふれ時ハ上がまへに居給ふとするが。
かなりとも用のけるときさすれんず
とといふ人なりし。

▲貴人之行跡
堀のかたこうもいし。公方八謀叛乃時ぜつこ
生るありて上京放火なされし

うりしは運一揆なれ前よりて今
洛中のさわぎ。上下からだれそれなる
事。まの代末代と申ニなれバ。さ行る物
ずるがくそれたられるやうをつと仁
わ達てい。上京より火りて西と見て。二条よい
ひしむ氏寿まの我子とさへつまでの宅
べをもひと共ひ。ごつ四つなる子とせかり
よおひらしつをかるとめき。四条の橋れを
とまくぐおけきふり。かまりくらし。

ちとまをおうして四をまんとしかもひ。
地のうへまどうとをひて見れバ。石うす
まそびりひかる
△大名乃世まもぐまて把見なる大髭を
おち入りおり。かまりふひぎをまんし。
公房衍のされよ。世の人ハまか髭をバ。なりふ
とりふうと云ひかふ世上ニ高様のれ髭
とがるされどにかくされと申さね
されハ此度もいと申すぐ物大名うち

あまりおひだるさに誰をさいはふとひげ
となくしてぞうこそあるこえよとと
まねかせおひかたちかくよせさてやみて。
かづらひきとゞくへ弓矢八幡日本
されしや

▲大名のもとへ客行り振舞に湯漬出さ
れぞを席へもち客わにもそれぞれに膳汁
まへまいり又家来わり膳を出せて給仕を
どもそれかよきある時ねまゐする人ありと
らび出しやうにとて顔をいつくねるにめど
うきや湯をこえてみるさねうとぞんをねるゝ
時分をつけて湯を出す座るがはげが
はさすひとのきけれどもとかく
ひよなりまする

旅

▲賭ゆかりける仁にまびとすまひける
が秘そそこれはしまれつきろまつい茶
まそめうるとれりとうふ生得之久

がわるけれど。はまへいりておりふするる
とりふをぐでんしおくりおる時分のるをまる
まゐりける先へ二百疋柄の朱塗二十本か
ぶろうぢやうちの中間どもれいらしゆをと
兄弟をうつくしそこを世ハひろし。尋ね
なるまいや蔵ぜるがふたとそなたさま。
んずるやとたひるまへてそをするよとて
う鑓のえれいろハ火をさいてひいてとも
れじや くろ竹まかしなかじひたへがらふわつ

たりやといふて
▲藤又郎とてござりしきこゑとげるそれ
とそうつきとしうをよ。在京ちゆかり
たゞじやどまり二人つまうち。講堂たん
風呂をいりんとも。藤又郎ハ種ある中これ
ぐうけとかりしく見はき。幸すん事之。
小風呂あるく行きまとてんとうくこ。
かまのへてあるか市。京のなしひよ。風呂よ
入られハ必わきまとえるそ。腹をふつる

といふ人とりふんどしまでもこゝろゆるが
狂人ぞといひてしへ水風呂などとをひ
入りあやまち自ともかのなるをえらりとま。
ゐるたれいふぐれやくりせたりとさるさする
かくとぞぞ一つえりてよりぞ叢文事
又くりせるといとぞるすれまりふゆう。我
えりりまてかつんべ乾気一すしと
めんじ。乾人力よわくと入をれぞ
またくおづくきつとりたらまいぞ

かれわひて太よ勝を見てはぐくのうつけ
わぞ是非えりりくさんとまめくる時。きるすれ
いふゆう。叢文事いりひいなりされが
行るは禍もされじや
風呂さこさの我身はそくになりそそく
人は垢をいふされをれの那
△老人漆をうつむ時がまへて人乃目をはばかり
蛇はすて身がらる時斗銭はそれると
いふを円の気宇居そかと渋をかり

てとりのへ蛇をいきてちなうり。件ぶん
亭主も後はわりてこれを。蛇わりやまひを
まじやかんとされさりと。眼病をぞなれ
まつりしそ守すされ

▲男子一人あり。親の心にひとて。其子を
持し口より主する時に。其子いふ親しき人ぞ。
ふかまなりあよ。汝そふかが。んやもく首へ
とかうかとそて。世で知り。朝をさうさん
まちあり。毎日会て拇つゝんれむ事ゆ

久しく朋友よりかふさびよけよせよかし
ともくむきどもをくゆるさびぐくつき
しがも人をとうつきと見れし。何分時
をして子とかとり借はするさんへかり
こさにたけ子よむひぽよつけをちふて見
おしいふに。ぽけとり一日もちふをくはつ
うし訳志や人よ。おかりなのひといふてく

▲十人計つきぶらそて。小野へ寄かうり
参詣しけり。其又日らん参ゐされば。ぐ

だされ。下向(げかう)する道(みち)すがら。夜(よ)をこのうる
わけね。然(しか)るに友達(ともだち)の中(なか)よ。一人(いちにん)勝(かつ)のよりと
これく。賭(ばくち)さやくのうりに。刀(かたな)をさへ
てさしうるこハ何(なん)とするぞといふよ。
肝(きも)をつぶしさやをねき。ふところへ
いれんとすれどもおしおけくり
いふうハ出すまじれんにこそさやをとう
きね。
▲かきうつたのわりしがへよむりめく。

我(われ)ハ日本一乃ますをつくえたいくとく
いふ何事をとらふ。されんようをよ
て来(こめ)をつくところに。勿論(もちろん)するへさが
ゆきねハ。御(ご)くよふろが。足わがるこきねが。
いるとつゐまり。不孝(ふかう)人をもらをとひ
さゐよつり来をへくつらハ。母ともに
来たろこ。杵(きね)のわけさきそつまるまひ
とぶ家(か)んしろとひひをくそねよ。我(さ)そ
はりさげるらとに。米丸入ゆうハと。

とへん。気に其忘家はとうんざよ

▲石列に板持といふ侍わり。板持のやうな人あやわり家のたよれ共獦る出合く座敷へ請じ。主人は他りよゆとをてかしかきまわひえりし悔なりぞ。ぷ心楊子をわけ。ミづりら歌とういらくより様よく。後は筍ちのうぞとと

▲七月風流と他郷よりく候。太宗好悪といふ地下のとしうりるれば。かもしくよ

築山りなりしきも。相撲とするをれぞつきうる土民よ此烏帽子風流な入をのぞそちたまるをといひうへ。命彼ではよとさねぐて一両日も色風流とうく候。こらくわらく。名は何るのとどうふよ。中くわるところ。宮ぞ相ぶよがむ候。名しとなひされん。名元悪房の出ど石よ行るとなむてりは何を聞の答よ。何えねとん。右ら悪

が古居のなかりしとなり
春香節
▲とられてあつきさかりに寒くこそあれ風情(ふぜい)
ありし何とうやとありひて在郷(ざいごう)の者
夜まいりに南北(なんぼく)やなんどいふ処(ところ)へとうらく
とうりよ来れり。亭主(ていしゆ)とうふをとら
どんざいかうしの小豆(あづき)のとうふか。いやい
はもの大豆(まめ)にてといふ。それすらえ
うふまひからし味わるまひ程ぞと。

亭主の口上作意(こうじやうさくい)ゆうゆうおとくしとうく
きこえたり。人性歓年嗜欲害之と注(しるし)
南子(なんじ)ありと書(かき)たりぞ。
▲公家衆(くげしゆ)来給ふ亭主出て飯(めし)はわきまへども。麦(むぎ)
飯しやおわどにいやでわらぬどいふ。我は
生得(しやうとく)麦飯がすきじや。麦飯ならば三里(り)
もゆき(ゆき)てくふといふた。さらばとてふる
まひたり。又ある時俗(ぞく)の人来る(きたる)。それは麦
飯がまことじや狂なり。米のめしは何ま

どうも出さねといふよ。いや米の食かう
ぞめ筆もゆうふせてみなふうし
▲行る藝者の親子つまふうてきん人の
前よ行しうぱまそて十四文派なるた。
大名衆は庵ある月りりよわりし。ききさ
ざしろれつきをとりてえびるとをれ
かおゐれん。親がいひするゆうは、さやうに
おこしのもれあとをぴさとかわねをの
ぶ。大名八ひようくとぞござるくりが

行るものじやり
▲おれへ憎あきうひありと。つねうりいふ
志行り。喋ぐると憎みなうえぐへきてる。ち
とアさんもれと。かこうひなりまりく。
芝飛あると何まへ。何とこのそうもいよ。
胡椒いいうねうぱやいうねぞまなうしれ。
ちとうてふ。
賢蓮子
▲ねうしねりかしくる男。大名衆よへ参る。

何とぞよろしく。見てくださんぞと手をついて。
此一両月ハ。癲癇気にて取紛れ不案内仕ればと
戸上し。友達と座を出るに。そちら咳
気をとこそどつひつまおりのまくらさ
もして。ものね病の名をいひつる事よ。
いやがいさいハ。物好に好を知らうちとこが
りでんかんといそひでゐ。
▲古今三浴中歩行の折言行る挪花
ゐとハりよ。青磁の香爐たをいきわけ

主より。らつけるうりにばしゆうろんい
ふこととつれけまへば。肉よりなにと
そねても銀二枚と
▲行る僧小者を二人つれて。銭湯に行
夢ときくさわぎて。頭巾かつぎなかゞる。
小風呂に入ね。つ孫に行けりも。利口をいふ
がふくさた。小者を見ねふりし。二者
風呂めにより。頭巾をとりたりそとしひ
それぞ。さいがねていにおちる海をさいば

とさやとらふかあといひけれは

▲花見(くわけん)の興(けう)れ哉阿さをもてそれにお
なりぬ。花(くわ)の陰のほとりより人の立ちさるを
がるなれば。行くまゝをさげ。手を何
花で礼(れい)をする。つまの名わきは。石塔(せきとう)
守りとへて。ほんりと当世(たうせい)は。何れてい
の人りも礼をしてるがよいと。

▲力(ちから)へされいとるつて。手のさいふる銭
むしろ(さのこ)て。相撲(すまふ)をすく 雪(せこ)わり。又手てと

はんへはせこしをすくてぞ。ちりく雑兵(ざうひやう)
ありとうでありて。相撲(すまふ)をこのむ坊主
あり。双方(さうはう)名(みやう)をあらはし。僧(そう)と俗(ぞく)といくさ
ひとしけれども。かのつよさによりて。手捕
やくにふれん。坊主うちと組しられぬ。
俗勝(ぞくしよう)をとりちかん相(さう)のおかしさ時(じ)まけぬく
のさゝまに。高(かう)くさと騒(さう)をわけ。ひかれと
乃坊主ともも。すまひをとりふるが。
おれ入(みたり)たほとに。そしくさいやつよおふた

るすかなハと。悪口(あくこう)をかりまくらしけた
りしさよ。

▲かいざうつもをとゝさて。かりくをの。
かやまちなわしとけやぶり。これから
血(ち)なかるくをかえて。笑止(せうし)やいふといふ
をおわまれば。いやくるしかりしれぞ。むりしよ
をぐいをとなねるちとある雑り。さて
おひさくやとべくわわなれぞ。まもも
かめらまんへ。やときこゝすやとくさ。

足(あし)をやぶり。血(ち)をあかれ何としてと
人のふとさいや先ハ大事なし。若(もし)
をいろはにほへとしおるかとり

醒睡笑巻之二目録

謂被謂物之由来（いはれぬるものゝゆらい）

落書（らくしよ）

ふはとのる

鈍副子（どんふうす）

無智之僧（むちのそう）

祝過る（いはひすぐる）もいな物

醒睡笑巻之二

謂被謂物之由来

▲一いづまをあかしするとてねまうて。すばぶ風呂といひ。そそぎの声となる歟。

柘榴風呂とよぶはなんぞといふや。ぐゞことお答。いるとのこゝろゝ。

▲一鈍八百ときゝ何といふ。聟が舅のもとよりゆきぴりんぎんま一礼ありて後。さうとありよまうし。と今くハ。公界むきなり

しば。塩をつかひてつゝそれがと。
きりて肝をつぶし。京へ儀よ塩をとり込
りのおもる。飛脚は塩をとりとよふ。
利口するもの合石亀の子といふきい
是なりとて。八百よりかうし。算悦
び。座敷へもちて出。塩をおしかり
もるとて。お留守せう。それより塩八
百といふことなりや。
いうがつかれといふすゝ。とれじとよ。

つるべきさ。宗色のかわる
武士のやうそれはうらうくとも
いうがはかれ。瀬田乃長もし
物を幸用といふ詞のかりよふに
とおといふ
わら塩を声さしもよしやするがなる
清見が関を三保なる松くら
しさみて歌の浦ゐべし。三保乃松かけの
面白さを詠めば。関ありとよがれぱえゆく、

まひわどりに。清見が関をよしにせよと
よめり

▲なべて上臈がたまへ。さてぢとりふと。
禁中にはまちがひとかや。さそ何かひ
おふのすごねかとりふぞ紫乃えんにや

▲わらんべは風の子とさむしれど世り
りふは何るすぞ梅のわらしの子なまき
ぞおり。

▲猩々とは飛にあり。訛をば猩にあり狐と

何かわ愚とさまし。ひさと物毎にこさ
海り正めくさぞ。なべて世の人。何かとき
いかひどろふをよとりふぞ。そぞしぞや
とのえんこなり

▲玄蕃風に玄るぞふりひとりは
玄るくあれどもやらうさなり

▲京にて家物とりきおろひ。庭にてん
ふしくたとこ城。六とは奈とりなりん。
ぎるなりゆ。屋ばにつさ。紫につき。てと

よ付。一切の附属様をつくりあるゝに。田舎のハ。
一尋を六尺にとるはなり。都のハ間尺をもつて
六尺三寸にとるべく。一尋とする法なりされ
ば亭主をバ。都の六尺三寸のあまりとかり。
つかうべき男をバ田舎の六尺のあまりと給ふ。
其中に主人たる人これとも。下男これともを
のごとくにちがひてまづ一つねに
中にて下人を六尺といふとなり。
落書

▲田中の主寓とてやまちらいはさきの
茶入を不用しぎりやう秘蔵して。
ござしられん
あり
二服さへいつもね茶入を名物などとび
わくへるこもかたのかはらしくの
▲一期終るる猿の城をかうし。和田とのよ
得。信長公御前世に越あ取りかわり。
信長のまつくハやぶつく京小袖
つるとくさしてくるしられざりけり

▲山門(さんもん)より。三井寺(みゐでら)をやぶり。鐘(かね)を叡山(えいさん)へとらし時
三井寺の児(ちご)きくしろうはなりけるん
つくべき子を山へとらへく

▲越中の大守(たいしゆ)。神保殿(じんぼとの)ハ蓮法寺殿のとき(このとき)
聟(むこ)まてありし。を清盛(えさいつい)まての勢
てよろつ恨(さそう)えぶりなりけれど
神保の家ハやがてまつまでましまじ
このうとぐとれくり英名の郷

▲甲斐(かい)の国武田信虎公(たけだのぶとらこう)の息女(そくぢよ)を。菊亭(きくてい)
殿(との)へ契約(けいやく)ありしが、いまだ聟入(むこいり)をなくさ
ぬまに。信虎公。菊亭殿へかへりける時
むこいりをまずとをぬさるれをうと入
こさくていよりともをそへ入た

▲諏訪(すわ)明神(みやうじん)を世に諏訪と云ける
とぞのきけり
世のことばいつかする人ぞ諏訪や
うとぞとりつくりて内(うち)にてぞげ

▲奈良の春日山に。枯木のありてかくろ
ひでりくらとをすくわり。それを袮宜これ
の中より。きれびくにとる。なかく河流
しるるよ

肌かけハとまつころもつ袮宜毛の
秋くれりやまとにひとりけらん

▲将軍様を害し石田治部少輔がくわ
佐関ケ原合戦ニまけおちを捕人となり。頸
とくうちうきし時　雄光

大ぐされ陣のくりやうをうけょて
ふやまくもうるさゞまんせうかな

▲慶長十九年の冬。将軍様大坂の城へ
よせらるゝ時。日本六十余州の軍兵
一騎ものこらず。出陣ある。本陣ハ茶臼
の茶磨山にて行りと。何ものゆかん
大将ハ家をとうちぎりやうすい山
うまハされねどよくぬかるき
ぬいとの作

▲仁掴らしき男。坊乃あたまに銭を入かゝ
ひさいきくとうけるぞ。何る家のわし
ら包婁てぎしうしか寒さ目なり。ぢ
ちとし火にを行くうり。茶をとのこてみと
とりわきぱらくと一月うしうり。是ハ
ならぬ。いまし人へさを行かうし修身なり
しう。恩りぎを世よおちふまそぐ命よ
さとくしおのよやと。滅をこがしはね
とひひけまぱ。恐ぢうよ火にわくうり。茶おと

乃こそへちさ脳よ。大する銅を弓喜うぐ
おにさし出にうり。これ何としるるまを
悲のよと志んしやくしくれぐ。そやなよ
ハんさとぞんをれ乳乃日なりと
▲碧よ耳わりといふすぞ。まるれぞん
でうちまハ。中く人ぞいかいとひひ西
しるゝうしろをとられぞ仁ぬうう。
肝をとまりて。ぞいさかとけしじやや
りふぞしらるし人へかむりるをすてよると

びぜのまくぱなされ京とむきびれう

▲はんゑんそとあげしきの岩をゆう。四方山(よもやま)のすどとうつくしきり。亭(てい)わかていかさ雨どの人とたりてはなぞ。まんや屋をこす人ぱ夜着(よぎ)でまつてせんやとりよぱいやいろかどの龍神山(じんやま)傳り。せうくさむきするがば之て代ぱ高頭(ひろう)とりつくこきのましいねるが夜(よ)ふるるよ之てがひぱ言てこ見えさむしぱ時よ亭(てい)をく

虎の孫(こまご)ぢこまハおしをかしかせさかととふぱいやさゆうのるすハあいとこふ。それすらバ。むしろを二枚(まい)きせてれよ。鼠(ねずみ)がきこ物を喰まハぱむひうし喰ずよ。

▲ある人連歌(れんが)の席(せき)よ句(く)を出(いだ)し。きうう満(まん)じる詞(ことば)をえつけぱよきうろいきて祈(えんじん)くといふて。膝(ひざ)をつきされハぱかま手を合つき社壇(やしろ)ゆゆくにとゆきれしるすよ。

▲鈍副子(どんふうす)

小性(こしやう)をかきて、ふうすに始(はじめ)て茶(ちや)をひろうする。るすの外(ほか)何(なに)しも是(これ)いと云(いひ)ありける時ら、と座(ざ)をたちまぎりぞれをまづわらびきさで、ほご座(ざ)るとぞ。さてくさそのまゝ日なたり。まうさうくりとを行(ゆ)くまひぞつきやと、わまへ。みきろと手(で)をつき、いや日なたも、ひろふゆ座る我(われ)よ。ほれ為(ため)行(ゆ)くぞ。まうさもほざらめと

▲病念(やまひねん)で後(のち)よろこびすのふるまひ行(ゆき)り。さうゐりれ分かれ。是(これ)乃りのみ。病れつるを、さるとりわけ。病れ舞(まひ)をえんやなどと、ゐやされぞきさふりをまひ杖(かさめ)しとき。一腕(ひとつ)ね、けるかうさこそて床(とこ)をふそふる矢(や)をとる。それにをちやまひとそ、やなどゐやさ、きぞおろ矢(や)を一つとりそへ、二つのやれ添、をつき合(あはせん)。狂(くるひ)のりさをなたへなりし。がつや、まひてみだやなとじ舞(まひ)おきかし

▲石引頓山まであるすぞとよ。常にいはう
合わる者。一人入たし。ぼろ名を荒君と流
く交遊よ鈍なる男ありて。つねよ荒
君と云名をもそれが。禅つくしと云ふ。
禅門腹立し。荒君とのふ紫わりぬ。あろ
まうるすハなきうい。やまうるえねと。さて
んべゑきんとて。つまそぢらわるゝハ。おん裁
へり。荒君と。じゃうと花さあて行り
荒と。これき荒君。これハ荒やらといふ

とゝへバ荒君の名れ名をとらくおバ
ゆまいバ。王が名と同じことぞ。王をまぁ
おもふてる事といひかへて。ぺそりね。坪君男
欣掌しけるが。又二三日ありて後。あり
わひし時。荒君ハうちまをもれ。さるくも
荒やうかなへしといひける。
▲始て蔵王するるわりが。座摂がまとかう
摂政が二三歳と。何よをおかてつるゝ。高人
吟ましょひうひむさとかの字をはけまひ。

少しふくしとわり。其後(そのゝち)膳(ぜん)をもちへ。碗(つやひ)のきを
除(のぞ)くに。亭の髭(ひげ)に飯粒(めしつぶ)がつく。右の男承れの
とりひまざいつぶがつきしと申る
▲人のいひ太刀わる事(こと)へだにもゆかき
ねなどしつけるまぎるすわり虎(とら)と
いふ字(じ)を。其のうちに書(くれ)てそれへ
きぬとそしゆる。後大きに虎といふ字
を書(かき)てましよとひろげ見せけるが。
なるまれ陣(ぢん)をすく。ほりとつくみつからおし

く安りひ。行る僧(そう)は叶くりされど。らいし
さう。其大ハ一倍(いちばい)をんもつにちつてまれよ
▲越中(ゑつちう)に井見(いみ)の庄(せうとの)などいふ大名行り。
世にもぐれたるうつけなりしが母御(ごぜ)常(つね)
に命を欺(あざむ)きのひしが。ある時乃見参(げんざん)せり。
笑止(せうし)やそれさハぢられをの行かどより。何
すとも心ひくさまくまいって。たゞすき佐江(さんろう)
ときくちと利口(りこう)ハそしをねるが。折檻(せつかん)
行しバさかどまで。ゑましさ地とど。

慶運法印ハ、ばんどうのとうけじひ是非と
色よ。一ねんをれとと云くされし
其後よ。八朔乃礼とそ。諸仍は仕わる。家老
乃人ア柄とりの諸儀ゑ秋万歳とよ
天気よりてとりのふあつゐよ。ひの大名が
みとれ諸侯て事をようしと。れ左りひさ
さまうにはいそせちひう
▲浴場まそ。浄土宗の尼へ。尼公れよりつれ
一人の弟子ととよひ出し。十念をとうけ

よし。披露していびろとわりしろ。ひれ
さるとて。方丈よりて下京まで。たとえよ
乃女人の来りまゆと。尸も何ねよ老
んをいつし。上臈とく。女房とまそ尸へるれ。
によみんといふ。すやわつと。大よ志うり
きゞれど。弟子れ返答よ。そたうさは我よ。
何さ理をきへて。善男子善女人と
いふといひてかあくぞそのまちらういね
とは一事要相するをあとさんぐよ

くちひそて。かきそへあるる時。ふる京面し
て。せうしや。お拷擓（きがん）のわきをとする。
下句（げく）をんやとゝされきまバ。才子いふ。いや
くるしうなしなれ。ちと女房ごとれいぞ入で
の庭（さ）わるといふさ

▲小僧（こぞう）わり小夜（さよ）ふけて出拵（あげざか）をとち。庭（には）を
わすここたちふう浜りる。坊主覚（ぼうずこれ）を見は
け。それは何るすをするぞとやふ克れ（そう）りが
りしさみがちをとさんともれとも蒿（かち）ぬ

とりへぞ。さそく絶（ぜつ）るるなつや。それ疑さくか
すふてなる柏の。そこうしい拵がとくくま
い。なわへわづまでといわれるただてんさ
をん。帰遊（しょうよう）の拐勇（しゆん）をらくし

星（ほし）ひとつ見つけたる夜（よ）のうれしさハ
月にもまさる五月雨（さつきあめ）のそら

▲三つき男の聟入（むこいり）するといふ。知音（ちいん）なる
異見（いけん）し。かまへて時宜（じぎ）をでく世心（こころえ）るよし
万づ行（ゆき）しが。一渡のそれしも。つかまつりそれい

あくまびとさ海より手をさしつきで中から
抜かんとなるものでゝ座るかどれかしまゐりた
ほどう

▲京まで口ききしるき男ちと出家をふ
かりてゐるよはゐてあそびてやしなひつゝ
さかしきんよむかひとふやとこさ事なり
をしへんずんちゆつよわふさ時おそうい
いづくへとりふへしぐさしめて風よ海のせ
てといそんぎる。それ時風をまきとらへ八

いゝんとのへやかしく開口ましぐちうへ浅えん
わる行者るつあまそで出家よりわふ。此僧ハ
いばくつとそふ。僧の乞食して三貫の勤めの
所へ訴まゆくなおそ開きや男よってゐり
えかれおうお僧を。爪おいおまをさたいよ
のと

▲無智の僧

大般若を転読の施主あり。かるとちがかりを
出家の身。よむべきかてんぶかれどいゝ勿り

おもて座をかへり。布施をゆゑさきにわけゆへ。
法衣をまとひ膝をくみ。人々天般若波羅
密と高聲によみあへ。經をひろげたれ
獅子よわざ大さんが三藐がふしぎんが。
ようるいをれをわりてきてをいそ。今は旦ん
ぎをとりはのゑとみとものべきりすんだ
ずかし

▲平部孫讀の請状ありけるよ。一丈ふ宛
の經よる坊おりつりふ小者を松菊といふ

まねりひて。此度の出仕生涯の大事とた
がゆるぞ。それ坐禅ふりをとくめ。諷經ろ
れるとまことめよ。よろづま返すり
とそくハ。株すなんとひつけ。さて大
衆の座よつらなり。讀經もそにたまり。
席弟第一とつらなりし。彼經を高らか
あくとつぷにをさづまいふ。速讀がをもち
がハきりしが。經をどろよめきの時。例の聲
をひしとうちきる。彼坊が唯一人。松菊と

よくふりの松の屋つとめてまゐるに。お湯(ゆ)
のまふべしと
祝(いはひ)もくゆをいかゞ
▲もうしたぞれじやよいりよおわりまく。
与(よ)三郎とりよ。中番(ちうばん)まで毎日(つごもり)の呪(ぜん)ひとつ肉(く)
へゐるき。此(こ)の宵(よひ)はねようとくやとに肉(く)
もやもくぽりもへおしたさそ来り。門(かど)と
まうけ。門よりたそやとそふ時。福乃神(かみ)
うそともころへよ。まかりちえとをわけし。

よびいまんと。称んじよろよいひふくめしく
のち。去しまさんなまうけ。鶏(にはとり)のなくと。関(かんぬき)し
やうまたぞそ。門よまちゐりぽおんれじ
とくぞとこくぞそくと。そふぽやら
これとこふ。時。去来(ぶげ)中くあけて。門
をわけてより。そこかと火(ひ)をとりし若水(わかみづ)
汲きうんをまどゆまとも。去しまうかのさ
肉わしくそ。ぞうしにおいりん。中番ふしん
よもひづくく家(あかれ)しおそぽよひまて

へし縁の神を打ちまれ。やゝしく酒をのみ
むしろよそひ出。佛天に膳をあげさし
きちと立ち侍よ。さらバ縁の神て出座ある。
おいとま申ていりすると申さ

▲ある女房のもとに。つかうく下女を
縁といふわりき大年のゆふべにまむ
かひそちへよひてやうへゆきそやすよ。
かまへてたこまりてうけとひ
まゝとやりぬ。夜もふけゝてしやまりてよ

べどもこうでに。されども門をたたく
をとせり。もやしとひ。それぞといふは
なうすかし。のまりはさへつしてぞ。縁の神
といひされだ。いや与三郎ではさうらふ
り縁でわし候。縁ハよびしてそへかへると
そのをとそてつゞやさけろ

▲行者で旅人五寿。一夜の中をとりし。
言しも出おひ。おゆうりのはいでよおかいか
なる芸能のいうとちとおたを給く

ありさへすれバ筆(さいはひ)の仕合(しあはせ)なりとて行まるゝを
ちらりよいりよて發句(ほつく)をさとおれり
と望(のぞむ)時

▲むかしハこゝちめしらうるとされ石佛(いしぼとけ)
町人(まちにんど)のとれいとひもろわり大晦日(おほつごもり)よ歳(さいぐ)
を實座(ぐわいはい)なる棚(かうか)につませけるが何(すゑ)とりん
くづれさうなり。亭主(ていしゆ)もわやうさ事なり
らい下(げ)をまむりひそのとしへ十日のうち
よわまたなる歳(さいぐ)がくづれてくはるくといふ

お歳(さいぐ)のめでたなるとのへとちつしんかり。
ちくしそ元三(ぐわんさん)のりんをいらふとこさ扉(とびら)
ひらけて下(しも)たる子こてれ。うれしげめで
たふなるとよふ゛むこてらうしてまうる
すもふまんせそでをけ。子こぶれがそらふ行(ゆく)ひる
き何ともわきめでたふたる事をまへそと

▲人まもくれていいふ待(まつ)と衣(ころも)の葉(は)なり。
鼠(ねずみ)の衣(ころも)の肉(にく)へ飛(とび)ちるとそてこしあれハ。
狡友(ひくりん)のひそれハ同(おなじ)ゝ見さ亦(ちま)とへ。

やくろ肉へとやおかりて絳みといへ
ば。何代より法衣しける袖を一重かけしかるに
いかにも鈍なる傷寄色を見る家かる色旻
独語ましまよりし。気よわよやうにいふ
て。小袖をとらん袖をとや。ひのはなるが。彼友人
わる脇よ此夕アまれがわるさま蔵かるくと。
嫁にゑるいとくかるまが。の鈍なる男ふ
とまぐ。それしそめてふさぎまさ嫁く
なしありけり

▲え三をいちひ。膳部とりおつかひ。目ハ、おぶんひ
あどぴろく走つてめてもかりね。盃わか
たこなりとともくらかなりハ。十針なる拙然。
かと座をたち。酒の汁よ孫まる鋼のうしら
をとりて。手のひ乃犬をよひ。ぐれハとうれ
うしらぞくへとりふよ。又七つ八つかなる
娘のえしやまり。母のくいのこきる。笑れお
ねをもちて。おこれハくれおふぞくるへ
といひし云無さ

醒睡笑巻之三目録

文字知顔

不文字

文之品々

自堕落

清僧

醒睡笑巻之三

文字知顔

▲六十ばかりなれど。いろはをも知りかねこうやの
学つ。手の子まさいもくれ近辺するとて。
まづ先栈木れるすと申よけところむ。ひそれ附
ひとご。栈の字何とかき申ぞといへば。ま
づ木へんよりきを。そはそりかとそへ。つくり
はうでくけといふ。ほげくに。それかど
ぜんではなるまを。やまひと申されし

▲俗(ぞくい)わる人の、りよ犬丸(ゐぬまるか)を太郎とつけたり。太郎〳〵とよべば、きこし浴なかたよしきくる子細(しさい)をしつくと云。ぎらくはしば。さそ云おもしとんじ労(らう)してみり白太(しろた)とをとめ太郎とよふ。ぱいらするんをちらうとさづ称れ若らうじき

▲武士なる人の名〳〵とりふが。彼(かれ)字のこたふでんとぞしゆる。又月(つき)とりふ字乃しをき。ふちとをしゆる。此二字をなしひえくいらさ海それがましきことするまで。りひおさんと云くまれなるが。ゆるときさなりるとぞ。座敷(ざしき)結れ嫁りしとぞ。名んふつするためへありく。何つまりぬろり。甚助(きこ)ろ気武士。威儀(いぎ)をきるとくかいけくろひ。でんろくよく。それはめるおれとぞえんくろふへばくちとこうせとぞんなへ嗜(たしなみ)さうか

▲脈(みやく)とそふ。浮中沈(ふちうちん)とも。七表八裏(へうり)九道(だう)とも。甘(かん)の名をさへ知らね程の医者(いしや)ある。脈をとれ(とう)し

後病ぢやといふ。胸はいたむかいや。中く
何よりもなふてわるい。脈はなし。扨足はひゆる
かわりや。いや何ともなふ。さうでわるいぬ。
脈しさうわる。頭痛わりや。いや何もしれぬ。
で何ともぬ。脈もわつるとぞ。他法よつくも。
かくもし損でわる。病人となりて薬をと
ようくんだ。ごもおしやの

不文字

▲えほよりんといふ。殺すぬを見れ

よまる。茶をはじめ膳をさせといふほそれまく
もへうり。さうれしきよ横番の餘党ぞ
やあじうんずるを受てさそはやうり
下ゐは芋大根なをり中よ餅上まとうぬ
らくふちてそるるそば横番の餘党ぞといふ
るすよとおわして。ふら餅乃なみさる方へ
行膳あらう。これでも度れをとうぬとて
ふらそれにをり。中よもちぞよいと大根
をとりふり。箸をとちて分けつはぞそ

とはよけいの様器は。一段（ずん）わろくてうまに出来候（そぞき）
いさゝかとりたまふと申たり
△おかしゆうたる者ども。人をもてなひて貴人（きにん）
のまへ（まろうど）行（ゆき）先上座（さ）の者。とくまゐらんとて。
家来（こちらち）の子ども乳に離（はな）れ（らうそき）なとしては無念（へいゆう）
し無念ては有まじ。正月よりいふ三月ま
でそれに礼参（とりまぎれまい）りをくれたりといひければ。
次（つぎ）に座（さ）したる。膝（ひざ）つき家（う）ち人へ。はなそれ挨拶
のありしとて申ものり。なにとなんどいふ無念へい

ゆうとはなにとあるまり。一つとんでとこう
やく（じゅうきゃく）し。何者ぞや。さやうれぬ大はうきれて
つゝしまゐらせとゆふて。其（その）次（つぎ）の者きゝて。
さてをはあれ大人とてあらん。ぞ大工や
などのうへにもいふとぞなりかけ。はゞかりて
ふらり。かやうなことをいふをきいて。かまわず乳
そそれましさん。しかとたよとさ
△人皆歳末（さいまつ）の礼とて。お寺（じさん）よしゆくぶつさ
ゆうに来年（らいねん）あかりあそばされ。此祝儀（ぎ）ア

きんとりみちを学文(がくもん)かうなる者口まね
としゆきぐりすそで。未来(らいよ)ハおかりしやす
まうた。ゆきうねとりせし

▲三人寄合(よりあひ)て一人がいふ。さそくみるれバなる
ハ。又一人いふ。おゆそでハすひ。志やうんかりん
じや。又一人がなかやう名ん中こうね
が。世ハ福つまるりとやうつる

▲物書(ものかき)者をまこ。文字(もじ)をつかハへ。かそ所(ところ)を
とへバ。新のくしとこそ行(ぎやう)の。草(さう)とよそく
清(しん)まで。のくしと云字ハ。志よ。のがちそすことハ。いかさ
まし。や。六日市の。ひいれ字を。さゝへ志ゝねゝ

▲仍(よつ)てさふる者へ。乱よひゝひ。おかべ。れ沖
かゝべれさつとりふをさ。やうのこど。ぐ。女房
流(なが)れの上にいふろそど志やうれげふりと
こひぬくるぐ。わる時。道の上臈(らふ)よとりし
て。振舞(ふるまひ)よりかゝりくるま。道へ座敷(ざしき)の
始終(しじう)をとりる。御盆(わきあし)の上まで。ふかれいつると
波(なみ)らうひいなりまくくみぐるかりしかん。

躄禅なきれば。すゑとてふぢうしにうき
う海りりそわるぞしよ

▲此かハ一日物語るといふるま。何をひつる
にとりる時。情かまこきうねるすり。物ハ物は
の物まそ行しふそ。もんハ。ね道念しや。
いやとようきさやうハ。まうるびな念よりし
ぐさゝ。て家人を家れ。すまをいふ事をいへ
ぞ。字ハもみ化しやとりふる

▲ちとうみとものひ人れらひ名るハ。此社
つまく草とさいくれそ。何そふハぐ。あ
をしろふんおと何うしうハ。を座よ
君なるちさしあて。かまへて口あくうり
ようそとやふて。お物くおもいるれ。またく
華れおへとのも。すべまハどくしやと
こきいるま。

▲永玄といふ。禅つわり。人来りてそちれ
ゑんのハなる时で何しぬ。玄ハ分るだん
かといふ。いや。ゑろぎんといひし。知音

するゆゑ字倒へ笑止者ひ。し後なんとと
いふがりくいへ。がてんく。お笑れもと
くぎんをとふ附。ひかりとくるへつる
とう

▲ もまとゑをつまそ。すりとんでとくゞ。
ゑくさまそりとこるへよ。よそへ。かわし
やとこよい字しやとまそなかつるゞ。
まつりと書れ。ゑくうきでなさるとい
ひろり

▲ これハくねど。紺口ふとのよ。てんびん
とハなふとかくぞや。継母とかくとこ
ふ。ぞれハ石紐合するとりふ。されバ
よそ唐うかの文字ハかうふとまく
よ。まくろとうくがよひ。たぜりすれバ。
ゑどくりでてこさとうゞ
文之丞く

▲ 根来まそ。岩室梅松とゐや字えし
者流よ。ござるすきし師のやひとよせ

なぐらひよんたらりをかけしとぞ。
せめてくさする人。ことくつひ。文字をかきつ
くさそうれしきよ。文章のうへは。されこの
まんとなり。とにかくにも筆をとらぬ
うちはいかれど。それはそうこそまいれ
たまふか。色代なり。ならひ。ひと

▲ある人右筆をよびて。此頃は久しく不通
何国海足にとかけと。それは如何様筆と
筆をもちぬるはそれすらばよくさこゆ
ゆかしは。此程はれがまゝにてられたるに候は

▲くせ有るものをよう。知音の方へ文をかやひ
ことさまは。筆をそれは日の字わりてそれ
下は四文字に何の海かりとこそいふ。何とも
合点ゆかねとて。文をもちね。後に見参
あく以前の文は内。なまじゐにまれありつる
ぞ。読まようをえしてぞかなするように
くつるまゝされんども。このはいはぜは見参かれ人をそて
わるが。七日のねかといふ字さへ見ゆるま

わくねり

▲とく当世ハ文章の主しかきくいゐるとりみちとこうて。伯さる人れくとより。初吉れ修へきしいるとかん遂をずる十八木松茸崔礼横くて
平井保昌入道
盂傳名

▲文盲なる人ゆりけをゆりにかるとて紙をひろげかれ立しくよ墨でつけ。立さ

とをしうでくびのりさまやろきもちらをすりし云て光をかりしわまるとりふておとつりりきう。言阿まうふづきゆげりをくせとりふしとれ夜つりせんとりふまく竪と椀のありりと書てをとしりう。くまにゆりさる仁合点しさうりねと云るすれ是非をさよげね
自慢落

▲板くへしとをんと。亭子かさ二三人席かし。

もてに板をまうりけるが。坊主師匠天井
をのぞけバ。ぞうりえだちになりしかど。なに庵
とれ見ゆる。お坊主ぞうりかするに。是が
何なすものぞとたづねとて。坊主のいさ
いで。それハ門前の茶の地蔵をそこなふぞ。
智よおかしさぐまくらげねもたしやよ
▲ひそかにつかれ杖の小膝やしくやま
かなふりうぱせんなるとなふて坊主ありつ
から嵯峨に行ぱいたたを夜交走つまり
ふるまひをふてくをとせうりぱうちらう
誰人そとぱ言ふ簡にとがめられハ。在家の
ら。莫久いにて、るぱえ戸をわけよと
▲わるひとり坊主。盗賊をしのびわへり
きくぱ或る夜へ。不平人来れり。口
どわぐりん料簡をおかりつるに。そすると
乃口ハ何とそしろひぞやぱ。ゆをつけられ
さるとこそ。いやわまりさむさにぱづし
一ともえさしを一口らふると

△昔より在世ちかきハ禁酒ありける中に
酒をこのむ僧ありてこそ般若とさせ。
角をとりいふたをも法論をわらせ上り
又部れ大会程と云付ぞれをとりあひあり
ありし酒をとりてもふ人へそまつらへ
ぞ是又般の大会程あり。京よりくさん
ますを掛かふ出般おりぞれ取よ折く
さらそゆかんと茶よおまり京にあひ
乃志げられども何まかく推してん

きりける時うちのもれ般若をもちてへ
冥途中まで酒れ匂ひとぶらひしさ
ゆる世ありしと口をあけ留りね。
そろくるりく家まぞればんぞ常
乃こく般をそんといふさしぶちとい
うくんとそ手まとりかりて見んまこ
とた丘般つくん内まこふてといふ数
がする
△天ま目ありと思ひおるとふまれとく

ひかるゆへ。ぜんにあまり気付つきば。
そこし
かられよしよる僧にやわりけん。あさき
初乃入堂なりけれ。こた歴劫不思儀乃
法味わり。先て化のうかひるには。七十二候
とそ。時乃うつるに感じ。これくうかり
ゆく。景物をゆきん。田鼠化して鶉とな
て。蒼海中に入て蛤となり。九友じて
雀となるといふすわつか。愚僧かさいは
そりくる。わへられ友じてぬるとなまん

と眼あになりけるし。此寄物に七れ読んせよ

清僧

▲人跡絶たる山中に。一宇の堂あり。蔓
やられて八萬方の秀をうく法書るれ
ば。世にわらん人の登られも立よりへきさ
よしをかるに。いかなる不備者余の行
着すわん。此佛閣にいをかると携ひなれ
鈔りし。又悪性乃ちわり髭ひあすし。
行きなど。おそろしき所に。なんとして

ひとりハを添まさん。此女房ハわるさものよ
と。嵐ごとき色の夜。立やすらひしけり。
彼俳諧の流よ。そなたとかれどよき。
この宴夜よをわかてうされど
の人やといひくり。縁もなき夫婦
しそと。人いつまでし押入てされど。何をか
坊主の花とも添されき。何そと云ふ
り。先さん家の伽ありといふて。三味
線入。犬とくまとそいでしたる

▲百三千年。いつまでかれ浪とよ。筑紫なん
らた宰府の天神乃飛梅。天火よやけ
て。ごさひ花さられ。ごきそそも浅ましし
こきすもの人皆源を知らし。知をもちて
ぬるをいつまでも。其ひしれ短冊をはけ
来る中よ。梅桜坊とぞ。勇猛精をな
俳諧の。よめる者よぞ拝勝をを
てとまへのをりし梅乃根よれらふ
むよりをかうじ花の散らさぬ

燈舞と木の稜よ結びて見えしひかれけまき
ぐゝとおつち縁の色わきさりけり。花芸喜
ま思ひしすよべく歳は隠で。それ御門
と。袖とともあてと合せし
山の端りくさりてぐいんまれもとぐ
長え世れ宛て秋の夜の月
解脱上人の世よ隠へは見わるたふるり。
俗よそむけい。狂人れよし。行おかられ
世中やーかいづまのところまかくさん

とくましとでをれ歌り引合て。衣の
袖をとおりわすき

[illegible]
[illegible]まなかち[illegible]の[illegible]
まめへおしよりよべく家ま[illegible]
を神とも仏ともおもひて命とし
[illegible]
[illegible]世[illegible]の後の月
[illegible]
解脱上人の世[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan